嘉納治五郎の武道観について

——古武道の保存及び合気武道との関係——

藤 堂 良 明・関 鎮 正*

A study of Jigoro Kano's view of Budo

——Keeping Bujyutsu and a relation with Aiki Budo——

Yoshiaki TODO and Shigenao SEKI*

Jigoro Kano created Judo excluding dangerous tricks from jujitsu. but on the other hand, he has devised how to practice Atemi-waza and Kansetsu-waza which is not to be included in Randori. At his latter years he has endevored to keep Kobudo consisting of Jujitsu, Kenjyutsu and Bojyutu. This time, I want to consider Jigoro Kano's view of Budo. It is summarized into the following three points.

(1) There are Nage-waza, Katame-waza and Atemi-waza in Judo. He created Randori on the basis of Nage-waza and Katame-waza and devised Kata on the basis of Atemi-waza. but he intented to create Randori on the basis of Atemi-waza at first. It was Randori to push ones opponent by gloved hands. However he could not create it during his life time because of the difficulty of its realization. And so he advised Judo trainer to practice Randori taking care of Atemi and to practice Kata which contains Atemi.

(2) Jigoro Kano found "A Kobudo Society" for keeping Bujutsu, and reviewed some tricks which is not to be included in Randori at 1928. He has endevored to keep Jujitsu, Bojutsu, Kenjutsu and has made up a sanctuary of Bujutsu.

(3) Jigoro Kano visited Morihei Uesiba his latter years. He was deeply moved by Irimi-waza Uesiba performed, and so he sent two men to Uesiba's. But he could not introduce Aiki Budo to Kodokan Judo.

Key words : Jigoro Kano, Randori, Kata, Kobudo Society, Aiki-Budo

Ⅰ. はじめに

嘉納治五郎は，明治十五年（1882）に，古流柔術の技のうち危険な技を省いて，誰でもが自由に攻防しあえる乱取を編み出し，武術に過ぎなかった柔術をスポーツ化させ，近代教育の一手段として柔道を出発させた人物である。こうした嘉納治五郎の柔道論については，これまで長谷川純三の『嘉納治五郎の教育と思想』を初めとして，多くの先行研究がある。しかし一方，柔術をスポーツ化する際に，乱取に採入れることのできなかった当身や関節技のあり方を模索したり，又古くから日本に伝わる柔，剣，棒，杖術等の古武道の保存に力を注いでいたこと等については，これまでほとんど研究されていない。

そこで今回は，こうした当身や関節技といった武術的要素のある技の取り扱いや，古武道に対する積極的な取り組みを，嘉納治五郎の武道観としてとらえ，次の三つの点から考察してみた。まず

＊明治神宮武道場至誠館

第一に，嘉納師範は乱取りに組み入れられない当身や関節技を，如何に修行者に実践させるように工夫したのか，又当身や関節技を含んだ乱取については，どのように考えていたのか。第二に，昭和三年に剣道界の高野佐三郎と協議し，講道館大塚道場に私的に設けた「古武道研究会」の意図と，その内容について明らかにしてみた。そして第三に，古武道研究の一貫として，嘉納師範は晩年，無手術の研究に乗り出し，当時海軍をバックに急速に国内に広まってきた合気武道の開祖，植芝盛平と交わり演武を見学している。この植芝の合気武道の技に対して，嘉納師範は如何なる考えを抱いていたのか，またその後，講道館柔道に合気武道の技を採入れることができたのか否かについても，考察してみた。

なおその際に使用する資料としては，喜納師範が著した文献はもとより，古武道研究会メンバーの著述，並びに合気道二代目道主，植芝吉祥丸氏に直接会い，その言葉も参考にして論を進めた。

II．柔術のスポーツ化とその限界

嘉納師範は十八歳の時に天神真楊流柔術を学び，二十二歳からは起倒流柔術を修行し，更に他の柔術も工夫して，明治十五年（1882）に講道館柔道を創始した。講道館を創始するにあたっては，「体育，勝負，修心」の三つの目的を持たせて，知育，徳育，体育の備わった人間を作り出していく，教育の一手段として柔道を出発させたのである。

嘉納師範は，体育の立場からは「勝負の為には何程良い手でも危険の恐れある様なものは悉く省き，又成るたけ一様に全体の筋肉を動かせ，若し或る部分の筋肉を多く動かせる様なことが必要な場合には，成るたけ其練習が不断に効用を為す様[1]」に柔術の技を研究工夫していったのである。そして古流柔術が，当身や関節技といった危険な技が多く，「形」でしか修行できなかったものを，危険な技を省いて，投技と固技を中心に，自由に攻防できる乱取を編み出していったのである。次に修心の立場からは，柔術が封建制度下での忠孝を基にした武士精神を涵養するのが目的であったのに対し，次のような精神修養を求めさせたのである。まず徳性の涵養をあげ，道場での「勇壮活発さや気風高尚，相互に尽し合う精神，自制の気持ちや礼儀作法[2]」といった精神を求めさせたのである。また練習の場では「観察や記憶，言語，試験，想像力，新しい思想を嫌わず容れる大量[3]」といった智力を養わせるように説いたのである。そして勝負の立場からは，試合に臨んでは「機先を制したり，熟慮断行，勝ってその勝におごることなく，負けて卑屈にならない[4]」といった精神を体験させ，こうした精神を社会生活に応用するように，と説いている。こうした面では，実利的価値に重点をおかれた従来の柔術から，新たに柔道として近代教育の目的に合致した条件を具備した近代武道へと昇華させたといって過言ではないだろう。

ところで，実際の勝負の考え方としては，柔道では「人を殺そうと思えば殺すことができ，傷めようと思えば傷めることができ，捕えようと思えば捕えることが出来，又向うより自分にその様なことを仕掛けて参った時は此方では能く之を防ぐことのできる術の練習を申します。之を摘んで申せば，肉体上で人を制し，人に制せられざる術の練習をいう[5]」と記し，乱取や競技だけでなく，武術として又護身術としての柔道を考えていたのである。そこで勝負を決する方法としては，柔道には投，固，当技の三つがあるから，投技と固技は乱取で練習させるようにした。一方，殺傷の技である当身や関節技は「実際の勝負に効験（きき め）のある手は不断は危険で出来ないから，専ら形に拠て練習せねばならない[6]」として，「形」でやらせるようにした。ここに乱取と「形」との二大練習方式が編を出されたのである。今，乱取と「形」との関係を記すと，図１のようになる。

ただ，明治二十二年頃には「形」部門に属する当身や関節技についても「初めから一種の約束を定めておいて極危険な手だけは省き，又打ったり突いたりする時は手袋の様なものでもはめてすれば，勝負法の乱取も出来ぬことはない。形ばかりでは真似事のようで実地の練習はできぬから，その欠を補うが為めには矢張一種の乱捕があった方がよい[7]」とも記し，手袋をはめる等すれば，当身技を含んだ乱取もできぬことは無い，と考えていたのである。そして，文部大臣榎本武揚，イタリー公使等を招いて行った大日本教育会の講演の際（明治22年）には，実際に次のよこうな五つの当身技を含んだ乱取を披露している。

一，向うから右手で打ってくるのです。それを此方では腰で投げるのです。

二，向うから右手で打ってくるのです。その手先を我が右手で捕り，捩ぢって，相手を縛るので

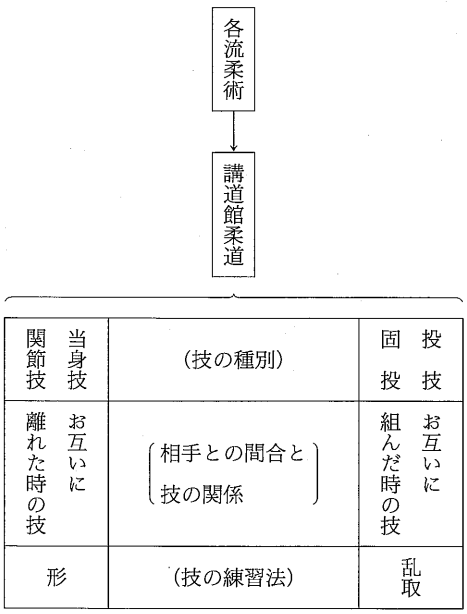

図１　乱取と形との関係図

す。

三，向うから突いてくるのです。此方では斯うすると向うは引きます。そこで此方はこういう風に入り込み咽喉を絞めるのです。

四，横から打ってきたのを，此方では斯ういう風にして，咽候を絞めるなり急所に当てたりするのです。

五，向うから蹴ってきたのを，此方ではその足先きを捕って，斯うして投げるのです。又はこうして固めても宜しいのです[8]。

その後も，こうした「離れて行う乱取」の実現に向けて研究はしていったが，大正時代に入ると，月次試合や紅白試合の他に，学校対抗戦や明治神宮国民体育大会等の試合が多くなり，修行者も乱取に夢中になり，この方面の研究は途絶えてしまった。かわりに，大正期には競技化に伴ういろいろな弊害が現われてきたので，嘉納師範はその是正に追われるようになっていった。例えば当時の試合では「無暗に力を入れてねじくりあったり，腰を引き腕で突張って，対手を近づけぬようにし，組み合う防御的姿勢が多く[9]」なり，又「道場では本当に当身を用いることがないから，脚を開き，腰を下げ顔を前に出した姿勢[10]」が多く，軽妙自在な動きが見られなくなってきた。そこで嘉納師範は，この弊害を救済するには，体育として又武術としての観点から，修行者に注意を促し，正しい柔道に戻そうとした。体育の立場からは「意志の命令に応じ，種々の調和した運動が即時にできるような[11]」自然体での姿勢を説いた。又武術の立場からは「当身技がこないと想定してやっているが，相手が突いてきても軽妙自在に動けるような構えでなければならぬ[12]」として，当身技を想定しての心構えと姿勢を説いた。更に乱取修行者には，乱取だけでなく「真剣勝負では当身や突いたり切ったりすることを必要とする。それだから形の練習を怠り乱取のみをしていると，そういう方面に欠陥が生じてくる[13]」とも記し，「極の形」や「精力善用国民体育」といった武術の「形」を練習せよ，と説いたのである。

そして昭和二年（1927）には「当身技を含めた乱取や試合は深く考究すれば，その方法は無でもあるまいと思う。しかしそれは投げたり抑えたりすることの優劣を決めるほど，たやすくはない[14]」と記し，当身技を含めた乱取は研究すればできなくはないが，現時点では仲々難しい，と結んでいる。

Ⅲ．古武道研究会の設立について

ところで，当身技を含んだ「離れて行う乱取」の実現に非観的見解を述べた翌年，昭和三年には，剣道界の高野佐三郎と協議し，講道館大塚道場を研究の場として「古武道研究会」を発足させた。この古武道研究会の設立の背景には，次のような考えがあったようだ。

(1)　大正11年（1922）に嘉納師範は，柔道の根本原理である精力善用，自他共栄の思想を各地で説いて，国民の思想を善導し，ひいては人類の発展に寄与しようと考えて講道館文化会を創設している。この会の目的は，その名の通り，文化面での社会への貢献であり，具体的には「１．各個人に対しては身体を強健にし智徳を錬磨し，２．国家に就いては国体を尊び歴史を重んじ其の隆昌を図り，３．世界全般に亘っては人種的偏見を去り文化の向上均霑に努め人類の共栄を図ろう[15]」とするものであった。つまりこの頃から，日本の歴史と文化を重んじ，国を隆昌させていこうという思いが強くなり，それが嘉納をして，日本の伝統的文化である古武道を保存し，

広く国民に関心を持ってもらおうとするものであったといえる。

(2) 講道館は武術として見た柔道に対して「まず権威ある研究機関を作ってわが国固有の武術を研究し，また広く海外の武術も及ぶ限り調査して最も進んだ武術を作り上げ，それを広くわが国民に教うることはもちろん，諸外国の人にも教えるつもりだ[16]」（嘉納師範の言）と記している。

(3) 「武術が殺傷の技術であったのに対し，武道は青少年の体育，知育，徳育に重点を指向した教育手段として近代化されたものである。従って技術的には殺傷の技としては有効でも，体育的には不適当と見なされた多くの技が全て淘汰されてしまった。嘉納治五郎先生は大正の末期から，これに対する再検討に入られて，当時既に消滅に頻していた古流武術の保存に力を入れた[17]」（古武道研究会メンバー望月稔の言）と記されている。

つまり，「古武道研究会」は，日本の伝統的武術を研究保存し，最も進んだ武術を作り上げるとともに，これまでスポーツ化されなかった技を再検討しようとして作られたものといえるだろう。そしてその活動としては，日本古来の柔，剣，棒，槍，杖術等の古武術の保存であったが，とりわけ「無手術には重きを置き，これに剣術と棒術を加える所存であるが，剣術の試合の練習は既にかなり世間に普及しているから，差し当り無手術の他には剣術及び棒術の形をもってするつもりだ[18]」と記し，無手術と剣術と棒術の「形」を研究保存していくことになった。

無手術については，次の章で述べることにして，この章では，剣術と棒術に関して見ていくことにする。嘉納は昭和３年２月には，香取神刀流剣術及び棒術の道場に赴き，玉井済道，故飯笹長威斉門下諸氏の「形」を見，研究している。この香取神刀流は軍法，剣法，薙刀，長巻，槍，居合，棒等の総合武術であり，我が国三大流派（神道流系統，新陰流系統，一刀流系統）のうちの一つであった。また開祖の飯篠長威斎は，日本の剣道史上中興の祖ともいわれ，剣術流派の中でも最も古い流祖であった。

また，棒術に関しては，昭和３年３月以降，講道館に館員を集め棒術の稽古を開始している。特にこの時は，講道館の有志を募り，千葉県から香取神道流の玉井幸平，椎名市蔵，伊藤種吉，久保木惣左衛門等を招き，練習を始めている。昭和７年頃からは，福岡から神道夢想流の清水隆次らを聘して，棒術の練習を続けた。昭和10年からは，日置隆介，武田二郎を中心に，これまでの修行者に新たに50人の志望者を募り，講道館の大道場に於いて，大規模に練習をするという有様であった。何故に喜納師範がこれほどまでに棒術に力を入れるようになったかは「不時に何事か起った場合，無手で攻撃防御の出来る武術が一番役に立つ。次に一層得られ易い武器を以て，攻撃防御することの出来るのが次に価値あると信ずる。槍や長刀より剣術がよいように，剣より一層得られ易い武器を以てする武術は，一層必要が多いといえよう。人は平素，杖やステッキや蝙蝠傘等を携帯する習慣があり，又棒切れのようなものは到る所に見当るから，イザという場合，そういうものを利用して闘うことが出来る[19]」と記し，日常簡単に得られやすい武器である棒術の稽古をするのが，不時の時に大変効果がある，と説いている。なお，昭和10年頃の棒術の稽古だが，火，木，土の夜の二時間を稽古に当てていた。稽古は先ず単独の基本（12本）から始め，次いで相対基本を12本，初段の形12本，中段の形12本，乱合が２本という順に行っていた。そして嘉納師範は近い将来に「在来の柔術諸流を基礎として今日の講道館柔道を大成したように，講道館柔道の一部門として講道館棒術を大成し，広く全世界に普及したい[20]」とも記し，柔道の一部門として講道館棒術を完成し，国内外に普及させたいと考えていたのである。

このように嘉納師範は，晩年は日本の伝統的武術，とりわけ無手術・剣術・棒術等の「形」の保存に力を注ぎ，講道館員に定期的に棒術を練習させる等して，講道館に武術の殿堂を作ろうとしていたのである。

Ⅳ．合気武道との関係

前章でも記したように，嘉納師範は古武道研究会まで作って，武術の保存に力を入れたが，中でも最も関心が高かったのは，何も持たずに素手で戦う無手術であった。このことは，講道館柔道を作るに際し，起倒流や天神真揚流といった柔術を基盤に作り上げたこととも深い関係があった。

昭和の初期に，無手術として注目をあびてきたものに，植芝盛平の創作した合気武道があった。

本来この合気武道は，植芝盛平が柳生流柔術や，武田惣角の大東流柔術等を学び，作り上げたものであった。簡単に合気武道の歴史を見てみると，大正元年に植芝盛平は大東流柔術の武田惣角と出会い，その技法を修行したが，やがて出口王仁三郎の説く大本教の教えに心酔し，大東流柔術の技術に「万有愛護」の精神を加味し，独自の技法を編み出していった。その後出口王仁三郎と共に入蒙し貴重な体験をして，武術のあり方を探究し，昭和2年には帰京して島津氏下屋敷玉突場に仮道場を設置した。そして昭和5年には目白台の道場を経て，5年12月には牛込若松町（現道場）へと移っている。時代と共に，大東流の名称も，大東流柔術から大東流合気柔術，合気柔術，合気武道へと変わっている。名称の変更と共に，「大東流柔術が関節の逆をとる荒っぽい技が多かったのに対し，合気武道では技を精選して，関節をきめる固め技と，合気投げを頂点とする投げ技に改良[21]」して大衆化が図られていったようだ。更にこの合気武道隆昌の背景には，当時海軍大将であった竹下勇を初めとする，海軍の強い支援があったことも見逃せない。

さて，昭和5年（1930）に，嘉納師範は，永岡秀一，高橋数良の3人で目白台の植芝道場を訪れている。何如なる機縁で，嘉納師範が，植芝の合気武道に関心を持つようになったかについては，次のようなことが考えられる。

(1) 当時海軍大将の竹下勇は，熱心な合気武術の修行者であり，植芝盛平より直々に学んでいた。又竹下勇は同時に柔道も修行しており，竹下勇が嘉納師範に「柔術に素晴らしいものが出てきた。今度海軍大学でやらせることにした。あなたも一度見に来ませんか[22]」と進言して，植芝を訪れる契機を作った。（古武道研究会メンバー望月稔の言）

(2) 講道館の富本謙治は，大正14年に植芝盛平の下で大東流合気柔術を修行し始め，それが縁で喜納師範に伝わったと考えられる。富木は10歳頃から柔道の道に入り，全日本柔道選士権大会にも宮城県代表として出場，30歳頃から柔道と異なる植芝の技法に感銘し，入門していった。昭和13年には満州国立建国大学で，実技合気武道を担当することになった。その別れの挨拶の為，講道館館長の嘉納を訪ねた時，「富木君，植芝さんの所でやっているような技が必要なのだ。昔の柔術というのは皆，植芝さんと同じようなことをやるのだ。しかしあれをどういう風に練習させるのかが問題で難しいんだ[23]」という主旨のことを語り，激励している。なお富木は戦後，独自の合気道競技を編み出し「離れて行う乱取」の実現に向けて意を注いだ。

(3) 昭和3年，学生柔道界のホープ，西見武，笠原巌夫，阿部信文が短期間ながらも植芝盛平に入門，このことが縁で嘉納師範に合気武道の存在を知らしめるきっかけになった。

(4) 竹下勇が，海軍大学で植芝盛平を講師として招いた時，同時に柔道の三船久三も講師をしており，植芝盛平と何らかの接触があったと思われる。そして三船久三が嘉納師範に，合気武道についていくばくかでも話していたと思われる（植芝吉祥丸氏の言）

このような機縁があって，嘉納帥範は目白台の植芝道場を訪れたものと思われる。

さて，その時の植芝盛平の演武が如何なるものであったかは「盛平は人が見ているからといって，技を変える人ではなかった。実戦的であり，素速い入り身で入り，パシッパシッと関節技を極めていたものと思われる」（吉祥丸氏の言）といわれるように，離隔からの素速い入り身，それに伴う当身技の攻防と，手首を中心とした関節技に特色があったといえよう。この時の植芝盛平の演武についての詳しい資料は無いが，植芝盛平の著した文献等を基に，植芝の技を簡単に説明すると次のようなことが言える。入り身とは「相手の攻撃が不可能で自分の攻撃が可能な位置に入ることである。また，それは，相手の攻撃が完遂する瞬間に自分の身体が相手の身体の中心，または重心を崩せる位置に入ることをも[24]」意味している。例えば相手が右足で一歩踏み込みながら右手刀で正面（額のあたり）を打ってきた場合に，相手の攻撃が起こった瞬間に打ち出してくる手刀に右手を添えながら右足を一歩踏み出し，すれ違うような形で相手の側面に立つと同時に，相手の手刀を受け流した右手の前腕と上腕を折り曲げ，肘でもって相手の首に掛けて，相手を後方に投げ倒す技である。現在では，正面打ち入り身投げと呼ばれているものであり，この他にも側面打ち入り身投げもあり，こうした技を演じたことは想像にかたくない。

又，植芝が考えた合気とは，「天地の気と己の気を合一させ」「宇宙の心に我心を一致させる[25]」と

いった多分に宗教的な意味を持たせながらも，自分の心の命ずるまま，自然の働きと一体となって技を発揮することをいっていた。又このことは，攻撃してくる相手と接触した瞬間に，相手の力や技を無力，無効にしてしまう技術の意味もあった。例えば，接触した瞬間に，相手の腕を内側にひねり，その姿勢を前方に崩したり（腕捻り等が含まれる），又相手の腕（手首も含む）を外側にひねり，その姿勢を後方に崩したりする技（腕返しや小手返し，転回小手返し等）がそれであった。

このような植芝盛平の入り身や関節技の演武に対し，嘉納師範は「これこそ私が理想としていた武道，即ち正真正銘の柔の道である[26]」と言ったという。嘉納師範は帰館後，側近に「植芝盛平を講道館の最高顧問として迎えたい。だが植芝はもはや名実備わった一家を成す存在である。それは到底できぬ相談であろう。次善の策として当方から心利いた者を植芝のもとへつかわし，せめてもの道の交流を図りたい[27]」との意向をもらしている。又事実，数日後，次のような書状とともに，講道館の望月稔，武田二郎の２名を植芝盛平の門へ出向させている。その折の書状は，

「拝啓，過日は推参御款待を受け，深謝奉り候。其節申し上げ候通り，真面目な者を選び，御指導を受けさせ度と存じ，物色致し居り候処，過日同伴し候武田と者す者と，さらに望月と申す者と両人を選定致し候。近日永岡秀一を伺わせ，御依頼致すべく候間，万事同人へ御申し聞かせ下され度候。先は過日の御挨拶を兼ね，右御依頼まで此の如くに候。草々不宣。[28]」（昭和５年10月28日）というものであった。なお，この時派遣された２名は，講道館より月給を支給されて，合気武道の技の修得に出向いている。いかに嘉納師範が，合気武道の技に関心を抱いていたのかを物語るものであろう。

さて，嘉納師範の言った「これこそ私が理想としていた武道だ。正真正銘の柔の道だ」と述べた言葉の奥には，どんな意味があったのだろうか。この言葉の真意を説き明かすには，嘉納師範の理想としていた柔道が，如何なるものであったかを見ていくことが必要であるだろう。嘉納師範は，『作興』の中で，自分の理想とする柔道として「立っている場合は，今日往々にして見るが如き，無暗に力を入れて，ねじくりあうというのではなく，ボクシングをやるものの姿勢等に類した一種の姿勢が乱取の姿勢になりうるのである[29]」と記して，ボクシングの様な姿勢を説いていたのである。また柔道は突くばかりでなく，投げも逆もとるから「ボクシングのように常に離れていなければならぬのではなく，接近しては着物をつかみ，手を捕え，又は首をとらえる。此場合に於ても，相手が突いてきたり，蹴てきた時に応じ得る身構えして接近せねばならない。其接近するに当り，どういう風に接近するかというと，或は相手の右の手首なり袖を引っ張る。自分は相手の言側に身を進める。向うの右手は取られているから攻撃が出来ない。左手は自由であるが，距離が遠いから危険が少ない。左の足も同様である。又右の足は接近しすぎて攻撃に不便である。こういう工合に考えて接近せねばならない。無暗に接近してはならない[29]」とも記し，最初はボクシングのように離れて対峙しながら，相手と組むや否や技を施すといった柔道を理想としていたのである。

こういう柔道を理想としていた嘉納師範にとっては，植芝盛平の演ずる素速い入り身，又組むや否や手首や上腕を制して倒していく合気武道の技に，深く感銘したことは想像にかたくない。同時に離隔（離れた姿勢）からの当て身の攻防と，手首を中心とした関節技に，武術として，又柔道の乱取に組み入れることの出来なかった技術の大切な要素を見てとったのだろう。更に，これまで嘉納師範の作り出した武術の「形」の代表である「極の形」と比べても，当て身を使って相手の懐に入るスピードには違いがあったし，関節技にしても，「極の形」が腋固めや腹固めに極めて終了するのが多かったのに対し，合気武道では手首や上腕を極めて，相手を投げ倒すといった投技への連絡が多かった。こうした点で，嘉納師範は「これこそ真の柔の道だ」と唱えたものと思える。

ただ残念なことに，具仕的にこうした合気武道の技を，柔道の乱取や「形」に採入れる試みは，嘉納師範存命中には成されなかったのである。このことは，依然として離隔技を乱取に採入れることは難しかったのであり，又合気道の「形」は合気道の独目なものとして生かしていって欲しいと願ったからだろう。そしてこの時に，植芝盛平の下に派遣された武田二郎もその後，棒術の指導者として講道館で任に当たっているだけであるし，望月稔も静岡に戻り，総合武道の一科目として合気武道を生かしているにすぎない。又富木謙治も

「離れて行う乱取」を唱え，柔道の大切な一分野だと主張したにもかかわらず，合気道競技として存続しているにすぎない。なお嘉納師範没後18年を経て，昭和31年に制定された「講道館護身術」には，合気武道の技と思われるものが幾つか盛込まれ，護身術の「形」として今日に生かされている。

V．まとめ

(1)柔術を集大成した嘉納師範は，投技と固技を中心に乱取を編を出し，当身や関節技といった危険な技は「形」として残した。しかし明治22年頃には，「形」部門に属する当身や関節技を含んだ乱取もあった方が良いと述べ，手袋等を試着して実演までしていた。ただ大正時代に入ると，対抗試合や競技が多くなり，当身技を含んだ乱取の研究は途絶えてしまった。そこで乱取修行者に「当身が来るのを想定して乱取せよ」とか「武術の要素を含んだ形を怠るな」等と説いて，武術の立場から注意を促すに止まった。そして昭和２年には「離れて行う乱取」の実現は大変難しい，と述懐している。

(2)嘉納師範は，翌昭和３年には日本の伝統的武術を研究保存し，又スポーツ化できなかった技を再検討していこうと考え，「古武道研究会」を設立した。柔術はもちろんのこと，総合武術である香取神刀流剣術の研究，又不時に何事か起こった時，身の回りで一番得やすい棒術の研究と保存に力を入れた。講道館員には，日を決めて棒術の練習をさせる等，他の武術にも関心を促し，講道館に武術の殿堂を作ろうとしていた。

(3)嘉納師範は晩年，古武道の中，特に無手術の研究に乗り出し，大東流合気柔術を基に作り上げられた植芝盛平の合気武道を見学した。ボクシングのような柔道を理想としていた嘉納にとっては，合気武道の離隔からの素速い入り身，並びに手首や上腕を制しての関節技に，武術として，又柔道の乱取に採入れることのできなかった大切な技術があると考え，講道館の数名を植芝盛平の基に派遣した。しかし存命中は，こうした技を柔道の乱取にも「形」にも採入れることができなかった。なお師範没後18年を経て，昭和31年に制定された「講道館護身術」には，合気武道の技が幾つか護身術の「形」として生かされている。

参考文献

1）渡辺一郎（1971）：史料明治武道史．新人物往来社，p.87.
2）同　上　p.94.
3）同　上　p.95.
4）同　上　p.95～96.
5）同　上　p.89.
6）同　上　p.91.
7）同　上　p.91.
8）同　上　p.92.
9）長谷川純三(1983)：嘉納治五郎の教育と思想．明治書院，p.337.
10）嘉納治五郎(1983)：喜納治五郎著作集第二巻．講道館，p.133.
11）長谷川純三(1983)：嘉納治五郎の教育と思想．明治書院，p. 336.
12）同　上　p.336.
13）嘉納治五郎(1983)：嘉納治五郎著作集第二巻．講道館，p.263.
14）諸橋轍次（1964）：嘉納治五郎．布井書房，p.372.
15）長谷川純三(1983)：嘉納治五郎の教育と思想．明治書院，p.385.
16）嘉納治五郎(1983)：嘉納治五郎著作集第二巻．講道館，p.105.
17）望月　稔（1978）：技法日本伝柔術―黒帯合気道．講談社，p.198.
18）嘉納治五郎（1983）：嘉納治五郎著作集第二巻・講道館，p.100.
19）嘉納治五郎(1935)：雑誌柔道第６巻４月号．講道館，p.4.
20）嘉納治五郎(1935)：雑誌柔道第６巻４月号，講道館，p.5.
21）植芝吉祥丸（1972）：合気道入門．光文社，p.54.
22）望月　稔(1986)：合気ニュース．No71，壮神社，p.13.
23）志々田文明ら（1985）：合気道教室．大修館書店，p.25.
24）植芝盛平．植芝吉祥丸（1957）：合気道．光和堂，p.129.
25）植芝吉祥丸（1978）：精説合気道秘要，東京書店，p.282.
26）植芝吉祥丸ら（1983）：日本の武道，講談社，p.216.
27）同　上　p.216.
28）植芝吉祥丸(1977)：合気道開祖植芝盛平伝．講談社，p.205.
29）長谷川純三(1983)：嘉納治五郎の教育と思想．明治書院，p.336.